

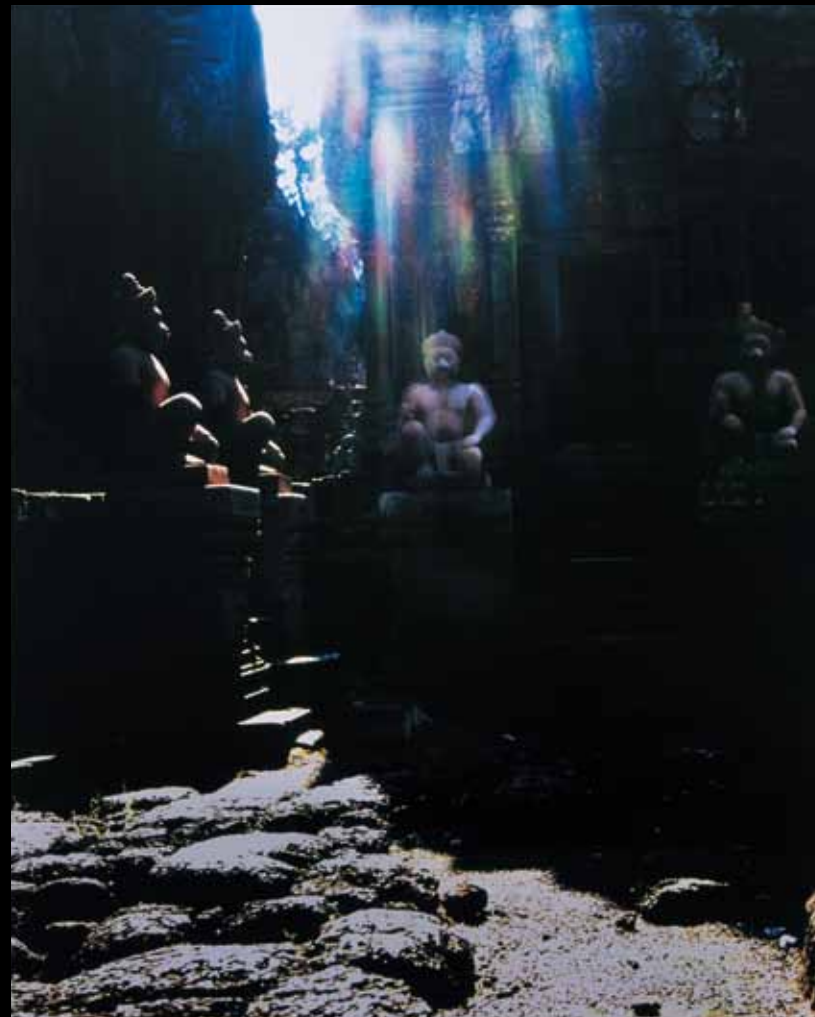
写真家

松本 登美

TOMI MATSUMOTO

降光

70.0 x 60.0 cm / 写真 / 2009 / バジェ・デ・ロス・スエニョス財団蔵



栃木の自然の美しさに

五感を刺激され、感性を磨く

「日光を見ずして結構と言っなかれ」。これは、日光にある東照宮の優美さを称賛して生まれた言葉。栃木県在住の松本登美は、日光をはじめとする栃木県の美しい景色に五感を刺激され、感性を磨いてきた写真家だ。

四季が織りなす美しい光景は、写真家としての松本を刺激している。「一年を通して鮮やかな表情を見せる場所はない」と話す。全国各地を回りながら写真を撮ってきた松本だからこそ、その言葉には重みがある。栃木には、日光や那須塩原、鬼怒川など幻想的な世界を映し出す場所も多く、彼女はそこで日々感性を磨いている。

元々は、子どもたちの成長記録として写真を撮っていた松本。本格的

に写真家として歩み始めたのは40代の頃で、当時の作品を20年以上経った今振り返ると「満足できる出来ではない」と厳しく話す。綺麗な写真を撮ろうという思いに縛られすぎず、鑑賞者の心に訴えかけるものがない。つまり、作品に深みがないというのだ。観る者の心に響く作品にするには、作者自身の感動を写真に籠める必要がある。まだまだ現在の作品にも満足することはないと語る松本だが、シャッターを切る際、自分自身が感動した風景や瞬間を切り取ることを一貫して心がけている。五感を研ぎ澄ませ、緊張感を持ってレンズ越しの景色に集中する。国内外で数々の作品を発表してきた経験から到達した彼女の撮影スタイルだ。



栄華

60.0 x 70.0 cm / 写真 / 1998